慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	麒麟考 : 東アジアにおける一角獣表象の基礎的研究 (一)
Sub Title	unicornis asianus I
Author	和泉, 雅人(Izumi, Masato)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2001
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.81, (2001. 12) ,p.23- 45
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	宮下啓三教授退任記念論文集
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00810001-0023

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

麒麟考

東アジアにおける一角獣表象の基礎的研究（一）

和泉　雅人

——O dieses ist das Tier, das es nicht gibt.
R.M.Rilke

——音中律呂行歩中規
「説苑」辨物篇

序

狩野探幽の麒麟図が日光東照宮内陣の襖絵にある。その幽玄な筆致は麒麟の霊性を表現してあますところがない。この世には属さない蒼緑の幻獣が悠然と歩みを進めている様は、まるで実在の麒麟がそこに息づいているかのようである。クロイスターズに所蔵される『一角獣狩』連作のなかで描かれる、「石榴の木に繋がれた一角獣」が西欧一角獣の藝術表現の最高点を示しているとすれば、探幽の麒麟図こそはユーラシア大陸からさらに東に渡った日本における、東

洋一角獣たる麒麟の最高の藝術的表現であるといっていいだろう。

麒麟は知られるごとく、仁獣・瑞獣としての位置価値を、ヨーロッパとは比較にならないくらい多数存在する東アジア幻獣のなかで示している。古代中国では、いわゆる四霊獣として麟鳳龍亀と呼称され、麒麟は霊獣のなかでも最高の地位を占めている。おそらく漢代以降、麒麟は諸文献のなかで活発に引用されたが、それは麒麟の霊性・聖性が権力者の装飾物としての適性をもっていたからにほかならない。それらの特性とともに麒麟は古代日本に渡来し、一角仙人やウニカウルなどの他の一角獣表象と同様に独自の発展を遂げた。その痕跡は——鳳龍亀の豊穣さとは比較にはならぬが——現代においても日光東照宮の陽明門を始めとして、諸処の宗教施設において見ることができる。さらに十七、十八世紀の狩野派絵画におけるモチーフとして麒麟は大きな地位を占めることになる。

しかしアジア一角獣としての麒麟の実態はいまだ闇の中にある。その原因は、麒麟がヨーロッパ一角獣とは異なり、キリスト教に匹敵するような強力な宗教的文化装置をもたなかったためである。麒麟は三教のうち仏教とさほど結合せず、むしろ儒教や道教と結びついていた。儒教はいわば処世の実学に近い性格をもち、思弁的・哲学的・神秘的傾向からは遠い思考体系であったがため、麒麟の霊化は仁獣・瑞獣の範疇にとどまらざるを得なかった。一方で非体系的な道教の影響のもと、麒麟は五行説などにも組み入れられ、さまざまな生活慣習・迷信のなかに入り込んだ。いずれにせよ、宗教体系に受け入れられなかった麒麟の伝統は断続的であり、また表層的である。ヨーロッパ一角獣の体系的・集約的な霊的深化に対して、アジア一角獣たる麒麟は表層的であり、幻想レヴェルにおいてさらに大きな自由度を獲得している。そしてまさにこの表層的拡散性こそが、麒麟の実態を見えにくくしているといえるだろう。

ここで一角獣そのものの分類について若干考察してみよう。広義には、一角獣とは一角をもつ獣の総称である。つま

りオリエントの幻想世界に生息する一角兎から、実在する印度犀にいたるまで広義の一角獣という範疇に入れることができる。他方狭義には、ヨーロッパ一角獣のごとく聖書のなかで重要な役割を果たし、『フィシオログス』のなかで毒消しや処女を見分ける能力を与えられ、ヨーロッパ・キリスト教文化の象徴体系のなかで特有の文化価値を帯びる獣をいう。つまり、一角獣の存在そのものが、一義的にある対象の処女性・聖性などをあらわす場合をいう。このような文化価値的作用の体系からみれば、実在する印度犀などは狭義の一角獣には属さない。すなわち、リルケも歌ったように[1]、その非在性こそが本来的な一角獣の有する第一のメルクマールであり、さらに一角獣を規定する第二のメルクマールとして、それは特殊な、中心的な文化価値を付与されていなければならない。最後に第三として、その文化価値が文化象徴価値にまで高められ、一義的な仕方で消費されていることが挙げられるだろう。

東アジア文化圏、とりわけ中国文化圏の場合、一角をもつ幻獣は多数存在している。それらはいずれも一角をもつゆえに、広義の一角獣という範疇に入るだろう。しかしこれらの一角幻獣はその非在性ゆえに自動的に狭義の一角獣とも見なされうるのだろうか。ここで中国の代表的な幻獣の書である『山海経』から主な一角獣を挙げてみよう。まず南山経では蠱雕が言及され、その形質として「その状は雕の如くで角があり、その声は嬰児の声のよう。これは人を食らう」とある[2]。ここには一角という表現は見られないが、図版ではおそらく一角の獣として描かれている。西山経では「その状は赤い豹の如く、五つの尾、一つの角、その声は石をかちあわせるよう、その名は狰」[3]とある。同じく西山経では駮という一角馬も登場する。その形状は「馬の如くで白い身、黒い尾、一つの角、虎の牙と爪、声は太鼓の音のよう、その名は駮、これは虎・豹を食う。剣難をふせぐによろし」[4]とある。このほかにもざっと数えただけで六種類の一角獣が描かれている[5]。いずれも非在の合成獣であることはいうまでもないが、『山海経』にあらわれる想像力には驚嘆

するほかはない。

それでは、一角という形態的な類似性やその非在性から、これら『山海経』に見られる中国の一角幻獣をキリスト教的ないわゆるヨーロッパ一角獣に対応するアジア一角獣と規定することは可能であろうか。残念ながら、われわれがヨーロッパ一角獣を狭義の一角獣として認識するときの他のメルクマール、すなわちある文化体系における強力な象徴的価値の集約性が『山海経』に登場する幻獣には欠けているのである。それら『山海経』に登場する一角幻獣たちには奇妙な象徴機能が与えられてはいるが、中国文化の体系においてそれらの機能は決して中心的でも代表的でもなかった。ヨーロッパ一角獣の場合、その一角性から唯一者であるイエス・キリストにすら譬えられ、処女にしかなつかないという性質から聖母マリアの処女性を示す表章物となったが、[6] そのような至高の存在、文化の中心的存在へのレフェレンツをもつ一角幻獣、これに比較的対応するものを東アジアに求めようとするならわずかに一頭しか存在していない。『山海経』には登場しない、仁獣・瑞獣として表象された霊獣、麒麟である。

しかしながら、麒麟の全体像はいまだほとんど知られていないのが現状である。本稿では世界的な一角獣種のなかで、ヨーロッパ一角獣に対応するアジア一角獣としての麒麟という視点から、以下において麒麟表象に関する考察を試みる。この立場はユーラシア大陸の東西にまたがる一角獣表象が相互に交流をもっていた可能性を前提としている。同時に付言しておかなければならないが、研究の現時点において、つまり本稿の論述の視座として、当然のことながら一義的に伝播説の立場を取るものではないし、麒麟が中国において独自に発展したとする自然発生説の可能性を否定するものではない。いずれかの立場に専一にたつことの不可能性は、表象史をいささかでも実践したことのある者ならただちに了解するところであろう。ただ本論考は、一角獣表象が世界的な分布をもち、したがって中国の麒麟表象もまた、

なんらかの仕方で世界的な一角獣表象の連鎖に連なる可能性をもつと考える立場にある。[7]

中国古代の麒麟（中国の古文献においてはしばしば「麟」とのみ呼称される）がいったいどこからやってきたのか、あるいはどこで成立したのか、どのような特性が付与され、どのような発展を経てきたのか、また、日本に伝播したのはいつ頃のことか、そして日本においてどのような展開を見せたのか、これらの諸点を中心に、可能なかぎり麒麟の実態を闡明することが本論考全体の具体的な目的である。[8]

第一章　中国における麒麟表象

第一節　霊獣から仁獣・瑞獣へ

以下、中国における麒麟表象に関わる言説の推移を分析し、麒麟の特質を明らかにするとともに仁獣・瑞獣としての麒麟の成立過程を追ってみたい。わずかではあるが津田左右吉、出石誠彦、松本新太郎、さらに塚本靖らの先行研究も存在するので、これらもまた参照することにしよう。

おそらく麒麟が仁獣・瑞獣としての地位を確立したのは漢代に入ってからのことであろう。周代以前、麟に言及した文献としては、わずかに戦国時代の『孟子』（公孫丑上）、『管子』（封禅）があるに過ぎない。麟という名前の登場する最古の文献といわれる[9]『詩経』国風には「麟之趾振振公子、于嗟麟兮、麟之定、振振公姓、于嗟麟兮、麟之角、振振公族、于嗟麟兮」とあり、公子、公姓、公族が麟の如く信望厚い者たちであることを言っている。しかしここから推測できることは、麟が周代において貴公子などに譬えられる資格をもった別格の存在であったことぐらいである。麟の特殊

な性格についてはまったく不明である。この意味で、「獲麟」の話の記載された『春秋』が、まとまった記述をもつ最古の文献なのかもしれない。しかし孔子がそこで筆をおいたと伝えられ、それゆえ「麟経」などと呼称されもする『春秋』の麟に関わる記載（紀元前四八一年）はきわめて散文的であっけない。「魯哀公一四年春西狩獲麟」というただこれだけの記載なのである。[10] この簡素きわまる記載から、いったいどのようにして「麟は仁獣・瑞獣なり」といった基本表象が成立していったのであろうか。そもそも孔子の生きた紀元前五〇〇年前後の時代、麟はどのような象徴的価値をもった獣であったのだろうか。『礼記』（礼運篇）には「麟・鳳・亀・龍、これを四霊という」と述べる記載がある。『礼記』は前漢、宣帝の頃の成立といわれるから、紀元前一世紀の時代、麟はすでに霊獣の一種としての地位を認められていたことがわかる。さらに戦国時代の『孟子』（公孫丑上）には孔子を讃えて「麒麟之於走獣、鳳凰之於飛鳥」という記述が見え、さらに『管子』（封禅）には「今鳳凰麒麟不来、嘉穀不生」という記載も見えるから、霊獣としての麒麟、瑞獣としての麒麟という表象はおそらく紀元前四世紀頃には確立していたと考えられるのではないだろうか。[11] 仁獣としての麒麟はしかし、春秋三伝のひとつ『春秋公羊傳』にいたっておそらく初見される。他の『左伝』『穀梁伝』においては単に事実を敷衍して述べているに過ぎないからである。[12] これに対して『公羊傳』の語りのトーンは事実を述べるというよりは劇的な一場面を描写しているかのようである。

何以書記異也何異爾非中国之獣也然則孰狩之薪采者也薪采者則微者也曷為以狩言之大之也曷為大之為獲麟大之曷為為獲麟大之麟者仁獣也有王者則至無王者則不至有以告者曰有麕而角者孔子曰孰為来哉孰為来哉反袂拭面涕沾袍顔淵死子曰噫天喪予子路死子曰噫天祝予西狩獲麟孔子曰吾道窮矣[13]

津田左右吉は『公羊傳』のイデオロギー性からその信憑性を問題にしているが、[14] われわれの注意を引くのは『公羊傳』において次の諸点が言及されていることである。（一）麒麟は中国の常なる獣ではない（二）麟を獲ることは本来有り得ないはずの大事件である（三）麟は仁獣である（四）麟は王者すなわち偉大な王が現われるときにのみ現われる瑞獣である（五）麟は死んでいる。引用された箇所では仁獣であることを示す具体的なメルクマールはこの段階ではまだ何も描写されておらず、また仁獣・瑞獣としての性質を厳密に区別していないものの、はっきりと瑞獣・仁獣としての麒麟の存在を告げるテクストとしては最初期にあたるものであろう。またこのテクストが孔子の言行を伝える信頼すべき典拠を与えているとすれば、[15] 麟は中国において常に見受けられるような獣ではないということであり、想像が許されるとすれば麟は本来外来種とも考えられ、きわめて興味深い。

麟は出現すべきときではないのに出現したわけだが、孔子素王説からいえば、孔子の存在こそ麟の出現を促したものにほかならない。孔子を信ずる人々にとっては、麟が告知した聖王とは、王座に就いていない王、無冠の王たる孔子であったはずだ。しかもその麟は死体で孔子と対面しているのである。孔子素王説の論理を一貫して進めるならば、孔子はみずからの死をあらかじめ見せつけられたことになるだろう。顔淵の死、子路の死、素王孔子の存在を讃えるべき麟の無残な死に様、そして麟の無残な死と対面してみずからの不遇の末路を、大業の挫折を知らされる孔子、『公羊傳』はこれらの要素を重ねあわせることで独特の悲劇的諧調を生み出しているといっていいだろう。このような悲劇的な語りのなかに登場する麟の存在は、後世の読書人たちに強烈な印象を与えずにはおかなかっただろう。この戦国時代末期から前漢初期にかけて成立していった劇的な語りの調子をもった『公羊傳』を源流として、さまざまな麒麟表象（形

態、性質等）の波紋が次々と広がっていき、あるいは新たに産み落とされていったとは考えられないだろうか。[16]

第二節　麒麟の形質

麒麟に関する中国の古文献を概観すれば、物語的な構成をもったものが皆無に近く、断片的な事典的記載の形式をとったものが圧倒的に多いことに気がつくだろう。麒麟に関する記載はきわめて多く、まさに枚挙にいとまがないほどである。そこで煩瑣を避けるため、漢代以降の麒麟を扱った文献のなかでも、『爾雅翼』および『宋書』にはかなりまとまった麒麟の記述が見えるから、これらの文献を主に引用しつつ、麒麟の形質について検討を加えることにしたい。年代的に『宋書』（四八八年）のほうが古く、『爾雅翼』（一一七四年）はこれを参照し、他の文献から情報を加えたものであろう。これらの記述からは麒麟の形態とその性質、麒麟に付加されたデノテーションが明確に浮かび上がってくる。

麒麟者仁獸也　牡曰麒牝曰麟　不刳胎剖卵則至　麞身而牛尾　狼項而一角　黄色而馬足　含仁而戴義　音中鐘呂
歩中規矩　不踐生虫　不折生草　不食不義　不飲洿池　不入抗穽　不行羅網　明王動靜　有儀則見　牡鳴曰逝聖
牝鳴曰歸和　春鳴扶幼　夏鳴日養綏（『宋書』）

麒麟麞身牛尾一角　春秋之書麟亦曰有麞而角者耳　蓋古之所謂麞者止於此　是以其物可得而有共性能避患妄食集
故其游於郊薮也　則以為萬物得其性太平之験　是不亦簡易而自然乎　至其後世論りん者　始曰馬足黄色圓蹄五角、

角端有肉、有翼能飛含仁懐義、音中律呂行歩周旋中規、折旋中矩游必擇土翔必後處　不履生蟲不折生草　不羣居不旅行不犯陷穽　不罹不網　牡鳴曰游聖　牝鳴曰歸和　夏鳴曰扶幼　秋鳴曰養綏　（『爾雅翼』）

第一項　形態

〈足と蹄〉

蹄の形態としては、「馬足」で「圓蹄」という記載から見るに、単蹄目と考えられていたようである。「鹿足」ではなく「馬足」が文献上一般的であるのは、興味深い。麒麟という名称のほかに騏驎という名称も存在することがあることからも理解できるように、一角獣である麒麟・騏驎が鹿として考えられているのか、あるいは馬を原種として考えられてきたのかは非常に興味深い点であろう。これらはのちに叙述する麒麟の源流に関する稿（「麒麟考（二）」）で再び扱うことになるが、古代中国人の単なるイメージ的偏差として片付けられない側面をもっているように思われる。

次に、蹄の形式であるが、これも興味深い。アリストテレスによれば、「角のあるものの大多数は双蹄で」[17]なければならないが、それは角を形成するさいの土質部分の質量が蹄から補われるためであった。[18] ところがアリストテレスは例外を認めていて、「単蹄であってしかも双角のものは、一つも見られない。しかし単角で単蹄のものは、インドロバのように少しはある。単角で双蹄のものはオリックスである」[19]と述べている。しかし、『爾雅翼』で「圓蹄」（単蹄）として記述されているのは、一角獣特有の蹄として単蹄が認められるからというわけではなく、おそらく単純に馬足から連想した結果であろう。ここでも馬が表象の基本形として登場しているのは注目に値する。鹿を基本種として構成された麒麟の場合、蹄は双蹄目とされている。しかしこれもまたアリストテレスのごとき体系的思考が背後にあって、その結

果そのように表象されたというよりは、単に鹿の蹄から連想したものである。

〈身体と色彩〉

麒麟の身体は「麕身」「春秋之書麟亦曰有麕而角者耳」「高一丈二尺」（『孫氏瑞應圖』）といわれているので、かなり大型の鹿である麕を基礎にして発想されたのであろうか。麟という文字の甲骨文を見ると、明らかに鹿の形象とは異なる形象を与えられており、甲骨文発生の時点で、つまり殷代において、すでに別種の存在として想像されていた可能性も否定できない。[20]

『爾雅翼』によれば麒麟は黄色となっている。身体全体が黄色であるとすると、それはヨーロッパ一角獣の色を思い起こさせる。ヨーロッパ一角獣は黄色というよりは、ベージュ色に近いとされているが、色彩の親近性は否定できないだろう。ところが『孫氏瑞應圖』によると麟は五彩をもつとある。「青日聳孤赤日炎駒白曰索冥黒日角端黄日麟麐」とあり、さらに「腹下黄」とその部位を特定している。[21] ここで言及されているのは青赤白黒黄であり、これらの色彩はいうまでもなく陰陽五行説の影響下において選択され、述べられたものである。[22] 陰陽五行説によれば五彩はそれぞれ青（木）赤（火）白（金）黒（水）黄（土）を表わし、いわば世界・宇宙を構成する五大元素としての位置づけをもつ。中央の黄をそれぞれの四色が取り囲む構図が一般的である。さらに五行は五常五徳と称される天から授かった徳を示し、それぞれ青（仁）赤（礼）白（義）黒（智）黄（信）とされる。それぞれの方位を支配する神々、いわゆる四神はそれぞれ東＝青（蒼竜）、南＝赤（朱雀）、西＝白（白虎）、北＝黒（玄武）とされ、それらの中央に黄（黄竜）が位置した。『瑞應圖』の記述は、仁の位置が中央でないことや麒麟のかわりに黄竜が登場していることなどを除けば、明ら

かに陰陽五行説を援用したものであることが明白であろう。漢代に流行した五行説がそれ以前に存在していた四霊獣をみずからのシステムのなかに取り込もうとした形跡がここにみてとれるだろう。すなわち「四霊獣の首[23]」「毛蟲三百六十而麟為之長[24]」として、それまでにも格別の地位を与えられていた麒麟は、陰陽五行説によってさらに古代中国の世界システムの中心へと躍り出ることになるのである。しかしもともと五行説は四神（朱雀、蒼竜、玄武、白虎）を柱としており、そこに第五神としての麒麟が入り込む余地はあまりない。そこで麒麟は木性であるとか（「春秋孔演図宋均注曰麟木精木生於水故曰陰木気好土土黄木青故麟色青黄」）、あるいは火に於いて生じたものである（「蔡邕月令章句曰凡麟生於火遊於土」）といった主張が恣意的になされることになった。『春秋孔演図』の宋均の注などは五行相生説を援用したものであろう。

〈角〉

最も重要な角は麒麟独自の構成をもっている。後漢のものと伝えられる「鍍金麒麟」（河南省博物館蔵）の像は高さ八・五センチの青銅製で鍍金の施された麒麟の立像であるが、この麒麟像の角は太く短く、先端は肉で覆われはっきりとした丸みを帯びている。角の長さは麒麟頭部の長さの三分の二程度であろう。ちなみに同じく後漢のものである武氏祠画像石に描かれた麒麟像も同様に角の先端が丸い肉で覆われている。角の長さも頭部より少し短い程度である。長さからのみ見る限り、ヨーロッパ一角獣の長大な角と比較すると、角はそれほど中心的役割を果たしていないようにすら考えられる。ところが麒麟の角に関して最も重要な特徴は、長さなどではなく、その先端を肉が蔽っていることなのである。まさにこの事実こそが麒麟を百獣から超越させ、その長の座に君臨させているゆえんなのである。『爾雅翼』に

は「角端有肉」とあり、さらに『公羊傳』には「麟者仁獣也（中略）一角而戴肉、設武備而不為害、所以為仁也」とあるから、麒麟の最大の武器である角のパラドキシカルな否定こそが仁を体現するものとして考えられたことを示している。殺生を目的とする角が、まさに殺生を否定するために付与されているのである。これほど逆説的な獣は他に存在しない。仁を体現する麒麟のこの特性はさらに「含仁懐義」「不履生蟲不折生草」（『宋書』『爾雅翼』）という記述と呼応している。すなわち、麒麟が仁獣であるゆえんは、決して他の生物を傷つけたり、殺したりすることがないからである。まさに酷政の引き起こす悲惨さとは好対照をなす存在なのである。最大の身体的特徴をなす角がその形態においてその仁たる性質を実体化していることは、アジア一角獣である麒麟の大きなメルクマールといっていいだろう。角は古来より力の象徴とされるとともに、強壮剤や薬としても使用されてきた。[25] 麟と鹿はしばしば同一視され、麟は鹿が発展して霊獣となったものだという主張もあるが、[26] 麟と鹿の関係については本論考のなかで別途論述するつもりである。

麒麟は一角獣であるが、必ずしも一角であるとは限らない。二角や五角の例も散見される。『爾雅翼』でも「五角」という記載が見られるくらいであるが、これらはおそらく――注の(7)において指摘したように――情報伝達の過程におけるいわゆる雑音の混入が生じたためである場合が多い。あるいはまた、麟が幻獣であるためその姿形が確定せず、いきおい既知の類似の動物からその手がかりを得ようとしたためなのかもしれない。しかしながら麒麟は厳然として一角獣であり、その角が一角であるがゆえに聖性の徴を帯びていることは議論の余地のないことである。ヨーロッパの場合、一角性はそのまま唯一者性へと推移し、唯一の存在であるイエス・キリストを表わすようになったが、この過程はキリスト教という文化装置があって初めて可能となったものである。しかし麒麟の場合、その一角性は他の凡百の獣と区別するための、霊性を示す機能しかもっていないようである。この点に関しては別途考察してみたい。

〈翼〉

『爾雅翼』にいう「有翼能飛」というのはどういうことであろうか。中国においては麒麟のみならず獅子にもしばしば翼がつけられ描写されることがある。翼については、自然の法則を超えた力をもつ意味で付加されることが多いから、その文脈で考えてもさほど誤りではないだろう。四足獣に翼を付加する傾向は、おそらく東西交渉路をつたって西方から伝播してきたペガサスの影響や、あるいは古代オリエントの有翼幻獣たちの影響が考えられる。[27] ちなみに狛犬の源流となったオリエントの守門獣である獅子像もまた有翼であり、それがシルクロードなどを経由して東方に伝えられたものであることがわかっている。スキタイ族の見事な闘争獣文様に有翼の怪物（グリフォン系幻獣）が登場していることからも、有翼獣表象に関して東西間に交渉のあったことが推察されるだろう。

オリエントの有翼一角獣としてはイラクのカルドゥンが挙げられるだろう。角は長く、額から背に向けて延びており、翼は胸のあたりから生え出ている。アレクサンドロス大王がオリエントで戦ったといわれる相手はカルカダンで、これは一角の強大な獣であったが、これもまた翼を有していた。[28]

古代中国において、例えば獅子は有翼で描かれることが多いが、これは獅子そのものが幻獣の領域に入れられていたことを示すとともに、天界となんらかの関係があったことを示している。[29] 麒麟の翼も同様に考えられ、麒麟が天帝の使走獣であったことを示す。明王の支配する地上界を嘉した天帝が麒麟を地上に派遣するのである。後代にいたり、翼は炎文様として描かれることが多くなった。

第二項　能力的特質

〈仁・瑞獣としての麒麟〉

次に麒麟の性質を見てみよう。その性質は形態の〈角〉の箇所で言及したように、まずは仁獣としてのそれがきわだっている。麒麟は百獣の長として尊拝される存在であるが、それは『五雑俎』に「麟之長百獣也以仁」とあるように、麒麟に備わる仁のゆえにほかならない。〈角〉の箇所において、麒麟の最大の武器であり身体的特徴である角の先端が他を傷つけないように肉で覆われていること、さらに「不履生蟲不折生草」という『宋書』『爾雅翼』の記述を引いて、麒麟が生けとし生けるものに害を与えない絶対的な不殺の実行者であることを述べたが、これに加えてさらに「音中律呂行歩周旋中規」という他の一角獣には見られない性質を指摘しなければならない。麒麟の鳴く声は音楽の音階であり、その歩みは礼＝規範にかなっている。[30] 紀元前三、四世紀、ギリシャのインド大使であったメガステネスは、ヨーロッパのインド知識の源泉のひとつであるその『インド誌』のなかで、インドの一角獣であるカルタゾーンの声が「とてつもなく大きく、耳障りなもの」であったと述べているのと対照的である。[31] 加えて『宋書』によれば、麒麟は穢れのある水や食物を摂取しない（「不食不義不飲洿池」）。また『爾雅翼』や『宋書』によれば麒麟が出現する場合も、穢れのないところを選んでいるようである（「游必擇土」）。このような諸性質を考え合わせると、これこそまさに人間を含めた生物中で最も尊敬されるべき高貴な存在に他ならない。あらゆる点からみて、麒麟は悪と穢れの対極に位置している。純粋な善を体現する獣、それが麒麟である。[32] その純粋性はわれわれに、あたかも肉を備えた実在の獣というよりは、善の精神の精華が凝固した存在であるかのような印象すら与えるのである。

麒麟は仁獣としての性質に加え、瑞獣としての性質も備えている。おそらく麒麟にまつわる逸話で最も有名なのが、

孔子と麒麟の出会いであろう。孔子の著したと伝えられる『春秋』の魯哀公一四年の項に、「魯哀公一四年春西狩麒麟」とあるのがそれである。わずか一行にも満たないこの記述が現代にまで伝えられているのは、『春秋』の後代の注釈書がこのわずかな記述を敷衍し、広めたためであろう。その最たるものが『春秋公羊伝』で、先述した如くきわめて劇的な逸話として仕立て上げられている。津田左右吉は『春秋』にあるこの哀公一四年の記述そのものが漢代のイデオロギー的改竄ではないかとの疑念を表明している。[33] 津田は『春秋』という書がそもそも天下の大統一を説き、一王による支配を説くものであるという前提にたつならば、獲麟の逸話は漢代において、それが漢代の聖王による支配を予言する瑞兆を示すものとして付加されたものか、あるいは単純に考えて、王ならぬ王が世に出たことを示すために付加されたものであるとの仮説を主張している。[34] 後者は孔子を聖王とする孔子素王説にたつものであり、麟の作用としては正統的であるといえるだろう。前者の仮説は漢代のイデオロギー装置として麒麟が利用される構図を浮かび上がらせていて興味深い。しかしその仮説の根拠として、孔子素王説が明確に唱えられたのは漢代にいたってからであり、さらに「祥瑞の話、又純粋に架空譚とみなすべきものが、此のほかには、春秋に見えないことも、また獲麟の記事の後からの添加であることを示すもの、やうである」[35]という推測を掲げるだけではいささか不十分のそしりをまぬがれないだろう。麒麟の存在が「純粋に架空譚とみなすべきもの」と考えるのは現代人の感覚であって、古代人のそれではない。古代の意識において麒麟は現実の存在であり、未知の獣を見たときに、それを既知の概念から解釈しようとするのは当然の過程であろう。要するに、孔子は自らが麟と考えた獣を見たと仮定するのが自然なのではないか。それを証するものとして、麒麟の捕獲・目撃報告が枚挙にいとまのないほど現存しているからである。それらのなかには完全に虚言としての報告も存在していただろうが、一方で麒麟と考えられた獣の捕獲報告もあったと考えるのが自然であり、この意味からも『春

秋』の麒麟に関する記載を後世の改竄と即断することはできないだろう。[36]

『宋書』によれば王者が酷政を施かなければ、その世には麒麟が出現する、とある（「不刳胎剖卵則至」「明王動静有義則見」）。瑞祥を体現する麒麟という表象は、政治イデオロギーによって麒麟が利用される格好の理由を提供してきた。『宋書』符端志巻一八には「漢武帝元狩元年十月行幸雍祠五畤獲白麟」[37]という記載から始まって、十五件の目撃証言、捕獲証言が列挙されている。[38]これらの真偽定かならぬ記載は、まさに世を支配する天子たちがいかに聖王に近い存在であるかを示す例証として挙げられているものである。[39]『淮南子』において、太古の皇帝である黄帝の御世がいかに正しく治められ、四民その幸福を祝っていたかという有様を示すために「鳳凰が庭に飛び、騏驎が郊外にあらわれる」と形容されているのも、また『孫氏瑞應圖』に「一角獣者六合同歸則至」と述べられ、天下太平が麒麟出現の条件とされているのも同断である。[40]麒麟が四霊獣の筆頭として、そのフィジカルな力や能力の故ではなく、その仁たる性質や、聖王・明王の出現を示したり、あるいは聖王・明王の治世であることを示す瑞獣としての性質ゆえに主に支配層に好まれたのである。[41]

ヨーロッパ一角獣にはない麒麟特有の特性として興味深いのは、麒麟の存在と天の事象、つまり天界の状況が連動しているということである。麒麟に異常な事態が発生すれば天界もまた異常な状態を示すのである。ここには星宿説の影響があるのかも知れない。[42]この『淮南子』天文訓によれば「虎嘯而谷風至　龍擧景雲屬　麒麟鬬而日月蝕　鯨魚死而彗星出」とある。前段の虎と龍に関しては『淮南鴻烈解』[43]によれば、「虎土物也谷風木風也　木生於土　故虎嘯而谷風至」などとあるから、五行説による解釈が十分可能であるらしいのだが、奇妙なことに麒麟に関して『淮南鴻烈解』は沈黙を守っている。もともと麒麟は五行説には馴染まないようであり、本論「身体と色彩」のところで見たように、なんと

か麒麟を五行説システムのなかに組み込もうとして必ずしも成功はしていない。従って『淮南子』のこの箇所は、唯一の武器である角ですら肉で覆い、動物や草の命さえ尊ぶ仁獣として知られる麒麟が、万一、相闘うような異常な状況が起こったとき、天界の基本的な事象である日月ですら異常な運行を示すことを強調しているのだろう。それは逆に日月に蝕が起これば、すなわち麒麟が闘うような異常な事態が現世の目に見えないところで発生しているということを示している。つまりここでも別の意味で麒麟は瑞獣的機能を果たすものと期待されているのである。

〈捕獲の不可能性〉

『春秋』を初めとして、麟が捕獲されたことを報ずる記述が見られるが、本来麒麟は捕獲することの不可能な存在であった。『宋書』によれば「不入坑穽不行羅網」とあり、同様の記述は上記の『爾雅翼』にも見られる。四霊獣の第一の獣として、麒麟は自然界を超越した存在であるから、これを実見することはまだしも、捕らえるなどとは有り得ない話ではあるが、麒麟のこの特質にはもう一つの説明が可能かもしれない。それはヨーロッパ一角獣のもつ能力との類推である。ヨーロッパ一角獣はまず捕獲できない。それはその性質が獰猛であり、またその足が地上の獣のなかでも最速であったからだ。「この獣の足は速く、しかも走るうちにますます速くなるため捕まえることができなかった」[44]と数ある目撃譚の一つが語っている。そこで一角獣を捕らえるには（勿論、一角獣狩は国王のレガーリエンであった）、まず一角獣の仔を捕らえねばならない。次にこの仔を囮にして怒り狂った凶暴な一角獣の親を捕らえるということになる。あるいは囮として乙女を使用するというのが最も有名な捕獲法かも知れない。囮を使わない一角獣狩もあり、それはメトロポリタンのクロイスターズに保管されている『一角獣狩』のタピスリーに描かれている。それはともかくヨーロッ

パ一角獣ならびにアジア一角獣はいずれもその捕獲が困難であったようだ。しかし困難であるにせよ、麒麟の捕獲がなかったわけでもなく、それにしては獲麟の際に麒麟の形態に関わる詳細な報告がなされていないのは奇妙な話であろう。（この稿続く）

注

（1）Die Sonette an Orpheus, zweiter Teil, IV.

（2）高馬美良訳『山海経』『抱朴子・列仙伝・神仙伝・山海経』（中国古典文学大系　第八巻）所収。四五九頁（図版は五二三頁）

（3）『山海経』四六五頁（図版は五二五頁）

（4）『山海経』四六六頁（図版は五二六頁）

（5）『山海経』四六七頁（北山経）には膽疏（かんそ）という幻獣が登場する。形状は馬の如くで、頭の一角に鍍金してあり、火を避けるに良い、とある。同じく北山経には駂馬（ぼつば）という幻獣が登場する。これは牛の尾をしており、白い身体で、一つの角をもち、その声は呼ぶようである（四六九頁）。さらに辣辣（とうとう）という獣も描写されている。これは羊の如き形状をし、一つ目で、一角である。目は耳の後ろにあり、鳴くときは自分の名を呼ぶ（四七二頁）。海外西経には乗黄（じょうこう）なる幻獣が言及されているが、これは狐の如くであり、その背に角がある。これに乗ることができれば寿命は二千年に延びるといわれる（四九〇頁）。この獣がいくつの角をもっているかは図版からわかる（五三二頁）。奇妙なことに図版によると背中には二本の角が生えており、さらに頭蓋の頂上から三角錐のような一角が生えている。本文ではこの頭蓋の角は言及されていないから、絵を描いた者が付加した可能性もある。さらに日本でも知られる兕（じ）が登場する（海内南経、四九三頁）。この獣の形状は牛のようであり、蒼黒く、一角をもつ。

（6）*Defensorium inviolatae virginitatis Mariae* については、R.R.ベーア『一角獣』和泉雅人訳、河出書房新社、一九九六年、一一四参照

(7) 伝播が問題になる場合、もっぱら空間的次元でいわれることが多いが、もちろん時間的次元での伝播も考慮に入れなければならない。同一地域における縦軸としての時間的伝播もまた当然問題にされなければならないのである。中国における麒麟表象の場合、中国を一体的な文化単位として捉えることが許されるなら、明らかにそれは時間的次元における伝播形態を示していた。それら麒麟表象に関わる情報がさまざまに付加的情報を加えつつ、あるいは脱落させつつ伝播していった様相があらわれた。このような状況は、イワーノフのいうような文化情報理論の立場からみて、原情報の誤った伝達結果、原情報に対するいわゆる雑音の混入という位相で処理されるだろう。(V.V.イワーノフ他著『宇宙樹・神話・歴史記述。モスクワ・タルトゥーグループ文化記号論集』北岡誠司訳、岩波現代選書七八、岩波書店、一九八三年、一一頁)ちなみに表象理論において重要なことは、この雑音に相当する歪曲された情報こそがある事物やイメージの形成に大きく関わり、やがてそれらの「雑音」が表象の環境を構成するに至るという点である。各地域、各時代、各文化において特有の雑音が加えられることによって、ともすれば問題とする表象の本質が見失われる事態すら生じうるのである。同時に顧慮しなければならないのは、原情報はいくつかの単位で構成されていることが多く、個々の構成単位がまとまって伝播していくとは限らない。各構成単位は潜伏する場合もあれば、失われる場合もあり、さらに異なる経路から突然姿を現す場合もある。原情報が時間的にまず存在し、それに対して時間的差延をもって順序良く雑音が付加されるとは限らないのである。原情報を再構成する手段として、われわれに残されているのは演繹的方法ではなく、帰納的方法のみであるから、表象史が展開していく過程において混入してきた原情報の構成単位を雑音と区別することはきわめて困難なことになるだろう。「原情報」「雑音」といった用語は、説話理論における「常数」「変数」といった思考法に強く影響されている。われわれはおそらくここで麒麟表象の「常数」といったものを求める作業を怠ってはならないだろう。「常数」はいわば「変数」の深層構造をなしており、「変数」の解析＝上位概念化を通じてのみ得られる要素である。とりわけ中国における麒麟表象の「変数」構成単位の場合、きわめて錯綜した様相を呈しており、この作業工程は不可欠なのである。

(8) 韓国の一角獣表象については別途扱うこととする。

(9) 野津龍「因幡の麒麟獅子舞（Ⅰ）」鳥取大学教育学部研究報告、一九九〇年、一頁

(10) この記事の解釈については後出の〈仁獣としての麒麟〉における津田左右吉の説を参照

(11) 霊獣と瑞獣との差異はそれほど厳密ではなく、霊獣は独立した行動圏をもった神話獣であり、瑞獣は天帝の使走獣として、天帝の意思を民に伝える機能をもつ。

(12) 『左伝』「哀公の一四年春、西方の大野で狩をして、叔孫氏の車士の子　商なるものが麟を得たが、これを不吉なものとして山林管理人に与えた。孔子はこれを見て、「これは麟である」と云い、そこでこれを記録することとした」。

(13) 以下参考のために大体の現代語訳を付す。「なぜこのことを記録したのか。異常なことであったからである。なぜ異常なのか。麟は中国の獣ではないからである。これを狩したのは誰か。きこりである。きこりは微賤のものである。それなのにどうして狩という重々しい言葉を使うのか。それは大事件だからである。なぜ大事件なのか。それは麟を獲たことが大事件だからである。なぜ麟を獲たことが大事件なのか。それは麟というものが仁獣だからである。麟は王者あるときに現われ、王者なきときには現われない。ところがこれを孔子に知らせたものの話では、この獣は鹿のようだけれども角があるといった。そこで孔子はそれが麟であると覚って「(現在のような明王のいない乱世に)なんすれば来るや、なんすれば来るや(どうして現われたのだ、どうして現われたのだ)」と袂で顔を拭い、涙を流して慟哭した。そして「ああ、吾が道、窮まれり」と嘆き悲しんだ」西嶋定生「孔子と麒麟」より。江上波夫監修『夢万年―聖獣伝説』講談社、昭和六三年(以下『聖獣伝説』と略す)、五八頁

(14) これについては本稿で後述している。三七頁参照

(15) 『公羊傳』のこの獲麟に関わる記載はまったくの虚構ではないかという主張もないではない。公羊伝を伝述したといわれる公羊高は博学の士で子夏に師事していた。とすればこの話とそれにまつわる孔子の言動を公羊高に伝えたのは子夏ということになろうが、それでは子夏が虚言を弄したのであろうか。あるいは子夏とは無関係に公羊高が創作したのであろうか。あるいはまた高の子孫たちの誰かが虚言を不可したのであろうか。本来、孔子―子夏―公羊高の直接的関係は時間的に見ても緊密であって、このなかにテクストの恣意的変更が入り込む可能性は考えにくいのではないか。子夏や公羊高がみずからの特定の意図をもって師に関わる虚言を付け加えたと推測する積極的理由が見当たらない。しかし、公羊高からその子孫である平、地、敢、寿へと伝述され、寿のときその弟子胡毋生とともにそれまで口伝されたものを竹帛に著し、董仲舒に伝えたということだから、文字によって確定される以前に、あるいは確定の際になんらかのテクスト改変が行われた可能性は否定できない。いわゆるTextkritikの結果が待たれるところではあるが、それもか

なり難しいだろう。『左伝』『穀梁伝』の記述は淡々としているが故に信ずるに足り、『公羊傳』のそれが劇的であるがゆえに信憑性を欠くというのは、『公羊傳』を否定する本質的理由になっていない。

(16) 平凡社中国古典文学大系第二巻『春秋左氏伝』(昭和五〇年)の竹内照夫による解説には『孔叢子』(漢代、孔鮒の撰と伝えられる)にある獲麟の話が掲載されている。(五二七―五二八頁)町の辻に打ち捨てられた麟を見て、孔子は「神々の世には麟や鳳凰が舞い遊ぶ、今はその時でもないのに、なぜ来たか、麟よ麟よ、なんと悲しいことだ」と歌ったという。これなども『公羊傳』の劇的な描写に触れてそれを敷衍したものと考えていいだろう。

(17) アリストテレース『動物誌』島崎三郎訳、岩波文庫(上、第二巻第一章499b,10b)、一九九八年、六五頁

(18) アリストテレース『動物誌』、三六七頁(訳注)

(19) アリストテレース『動物誌』、六六頁。アリストテレスは紀元前四世紀のギリシャ人クテシアスの旅行報告をもとにこれを書いているが、クテシアスの報告にはあまり信頼をおいていなかった。オリックスはアフリカに生息する双角の獣である。横から見ると一角に見えることがあるためしばしば一角獣であるかのように誤解された。

(20) 松丸道雄「「麒麟」の字源・語源」(『聖獣伝説』六八―六九頁)によると、麟字は甲骨文には見られないとのことである。本稿の筆者は大修館書店発行『大漢語林』の「麟」項記載の甲骨文を根拠としている。松丸はまた「甲骨文中に多数存在する各種の鹿類は、全て異体の象形字であって、形声字はない」と述べている。現在のところ、筆者はこれに対してコメントする知識をもっていない。

(21) 『淵鑑類函』巻四二九、獣部一より引用

(22) 松本新太郎『麒麟』(非売品)昭和七年、二二頁。さらに、森豊『シルクロードの怪神怪獣』(シルクロード史考察一九、六興出版、昭和五七年、六四頁)

(23) 『淵鑑類函』巻四二九、獣部一より引用

(24) 『大戴禮』。『淵鑑類函』巻四二九、獣部一より引用。麟は毛を生やした三六〇種の獣の王として、また、鳳凰は羽を生やした三六〇種の鳥類の王として描かれている。

(25) 古代オリエント博物館発行の『託されたイメージ。動物意匠―西から東へ』(堀 晄、宮下佐江子、石田恵子、津村眞輝子著、古代オリエント博物館発行、一九九六年)には鹿とその角がカルト化されていく様相が簡略に述べられてい

る。これによればとくに鹿の角の再生力が豊穣や大地の再生力の観念と結びつき、崇拝の対象となっていった。とくに袋角が強壮剤として、あるいは長寿をもたらす呪術的な薬として用いられたことが鹿の神聖視につながった、とある。（一八頁―二一頁）鹿の神格化については次稿で言及する予定である。

(26) 出石誠彦「支那の古文献に現はる、麒麟について」中央公論社『支那神話伝説の研究』一七七頁以降参照

(27) オリエントに生息していた有翼の四足獣と中国の有翼の幻獣との関係はきわめて興味深い主題のひとつであろう。スキタイ美術に多く登場するグリフィンなどは東西の幻獣交渉の中間段階を示すものかもしれない。紀元前三二〇〇年頃にメソポタミア南西部で誕生したといわれるグリフィン（『聖獣伝説』一四九頁）はその後発展し、獅子グリフィン系と鷲グリフィン系を生み出した。紀元前四世紀スキタイの鉄剣の鞘には両者が同時に描かれている。（『聖獣伝説』一五〇頁）翼は角と共に力の象徴であり、また自由の象徴でもある。それは空を飛べるはずがない大型の四足獣が軽がると飛翔するという自然界の法則からの自由をも意味しているのである。

(28) R.R.ベーア『一角獣』、六七―六九頁参照

(29) 『聖獣伝説』一三七頁参照

(30) 「牡鳴曰游聖　牝鳴曰歸和　夏鳴曰扶幼　秋鳴曰養綏」という叙述によれば、牡の鳴き声や牝の鳴き声、さらに夏や秋の麒麟の鳴き声にまで固有名詞が付けられている。これら鳴き声の意味について、筆者は現在のところつまびらかにしていない。

(31) ベーア『一角獣』、二二頁

(32) ヨーロッパ一角獣が暴力的で獅子を天敵とし、さらに「その声は不快である」と評されたのとは大きな相違がある。

(33) 津田左右吉「史學雑誌」史學會編、第三六編第六号、一九二五年、一七―一八頁

(34) 塚本靖「麒麟考」（考古学雑誌、第一巻第十号、明治四四年、六四三頁）は、日本橋に設置された二角の麒麟像に関して次のような見解を述べている。「麒麟出れば聖人現はるとい云ふ考えだと云ふ事であるが、支那の書物には古来未斯様な事は書いていない、仁君出づれば麒麟現はると云ふのが本来の説でこれが仁獣説明の第一である」。従って、津田の麒麟予兆説は文献的には実証されないことになるかもしれないが、塚本説が正確だとしても、麒麟表象を単なる瑞祥として使用したばかりではなく、その表象のデノテーションの射程のなかで予兆としても用いられたであろうことは想

像がつくから、津田の説をこれをもって否定することはできない。

(35) 津田左右吉、同上、一八頁

(36) とはいえ、津田の論証の方向は正しいのである。麒麟は支配者たちによってプロパガンダの道具として使用されていた。麒麟の政治イデオロギー化については本節後段参照。

(37) 白麟出現・捕獲の報告については、出石誠彦の上記論文が詳しく述べている。（一七八―一七九頁）出石は白鹿と白麟が同一であると考えているが、この点に関しては別途言及したい。鹿もまた祥瑞を示す獣であったことは確かであり、『抱朴子』には「鹿寿壱千歳、五百歳をこゆれば白鹿となる」とあるから、白鹿は歳経て霊気を帯びたものと解され、崇拝されたのであろう。東京国立博物館発行の展覧会カタログ『吉祥――中国美術に込められた意味』（一九九八年）によれば「中国最古の吉祥図」（八一頁）といわれる「漢李翕黽池五瑞図」にも白鹿の文字と図が見える（八〇頁）。白麟のもつ色彩である白もまたこの文脈で考えられ、歳経た麟であると推測されるかもしれないが、これに言及した文献が筆者に未知である。乞御教示。ちなみに同じく『抱朴子』には「麟寿三千歳」とあるから、単純計算でいけば、白麟は千五百歳ということになろうか。いずれも長寿を誇る吉祥獣である。

(38) 『宋書』四七七頁

(39) ここで思わず連想してしまうのは、ヨーロッパ一角獣が処女の証明のために利用されてきた事実であろう。hortus conclusus において聖母マリアが一角獣と共存しており、一角獣に突き殺されないのは聖母が処女懐胎を行った何よりの証左とされた。（参照　和泉雅人訳『一角獣』一一四頁）ここにおいてもアジア一角獣＝麒麟とヨーロッパ一角獣との類似性が顕著ではないだろうか。

(40) 『淮南子』覧冥訓第六

(41) この意味では津田左右吉（同上）の類推はあたっているだろう。

(42) 星宿説における天空の区分法である二八宿は紀元前七世紀以前にはすでに完成していたから、五行説が四神を使って二八宿を四方位に分けたときに、四霊獣の首と称された麒麟が使用されなかったのには相応の理由がなければならない。

(43) 巻第三、天文訓

(44) ベーア『一角獣』、一五頁